
箱庭の遊戯

柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の遊戯

【Nコード】

N1014BA

【作者名】

柚木

【あらすじ】

「調律の名のもとに命をもらいに来た」

神が定めた基準に従い、世界に満ちる『命の量』を一定に保つ調律者と呼ばれる彼らと、彼らに関わる人々。

様々な価値や想いは交錯し、対立し、人の生は営まれていく。それらは全て神に捧げられる演劇。

<リリアーヌ>

balanサー
調律者。

世界に満ちる『命の量』を、神が定めた基準に従い一定に保つ者たち。

世界は絶妙なる命の均衡のもと成り立っている。少なくとも多くてもそれは世界の崩壊に繋がる。

神から授かった力で時には不治の病に苦しむ人間を助け、時に産まれたばかりの赤子の命さえ無慈悲に奪う。

人々は彼らを感謝を込めて呼ぶ。神の御使いと。
人々は彼らを憎悪を以て呼ぶ。死神と。

「調律の名のもとに」

彼らは今日も、使命を果たす。

抜けるような青空と、気まぐれに浮かぶ白い雲。

そんな平和を体現したハレの日は、あの女のせいで私の人生最大の不幸な日となった。

「 エリック＝マクレガーはお前？」

その女は何の変哲もない若草色に染め上げた短めのワンピースと、機動性のためか腰ひもを縛り下に細身のパンツを履いていた。亜麻

色の髪を高い位置で一つに結び、ワンピースと同じ若草の瞳がこちらを見据える。歳は私よりいくらか若いだろう。ティーンにしては雰囲気落ち着きすぎていたが、未だ丸みを帯びる輪郭や胡桃の瞳は若い輝きを隠さない。

何処にでも、この村にもいる若い娘と何も変わらなかった。その左手に持つ、身の丈もある木の杖以外は。

その日は私と彼、エリック・マクレガーの結婚式だった。画家を夢見る彼との結婚は周囲が強く反対したが、それを乗りきってやっと結婚にまで漕ぎ着けたのだった。

幸せの絶頂にいた私たちは小さな教会へ続く道を、親や友に祝福されながら歩いていった。そんな最中、いきなり、それこそ影から出てきたように、私たちの正面に女が現れた。いっとう現れたのか誰も気づかなかった。好奇心と疑惑の混じる空気に晒されても少女は動じる素振りすら見せない。

「……ええっと、確かに俺がエリックだけど」
彼も周りの誰もがその女の纏う異常な雰囲気気付かないのか、若干の戸惑いを見せつつも普通に應對していた。私は、嫌な予感があった。

この女はダメだ。危険だ。早く逃げなくては

「ねえエリック……」

「エリック・マクレガー」

袖を引く私よりも強く明瞭、そして陰を宿す声が彼を呼ぶ。少女は手の杖を二回垂直に打ちつけた。木が地面を叩く硬い音が響き、辺りから音が消えた。否、そう感じるほど空気がはつきりと変わった。

「調律の名のもとにお前の命をもらいに来た」

クォーーン……

少女がそつと杖を振り下ろす。杖の先端が地面に触れ、そこが一瞬波打ったように見えた。そして聞いたこともない、あえて例えるなら暗い水底に眠る石を叩いたような、美しくも不安を掻き立てる音が……音が、鳴り渡ったと、そう思った時には。

「……………エリック、ク？」

一瞬前まで隣で笑っていたはずの恋人が、到底生きている人間の温度を思わせない肌の白さで倒れていた。

……………何が。一体何が起きたの。ねえ、エリック。

「調律完了」

先程から寸分足りとも変わらない声がそれを告げる。我に返った私は、少女の杖の先端に嵌め込まれた石が輝くのを見た。

それはほとんど反射だった。

「……………返して！ エリック！」

石に取り込まれてどんどん失っていく輝きを、本能で愛する人だと見分ける。私はウェディングドレスが汚れるのも破けるのも構わず、少女に飛びかかった。

しかし身軽な格好をした少女はひらりと半転して私を避けると、もう一度、杖で地面を叩く。それを合図に石は完全に輝きを失った……喪つて、しまった。

「エリック、マクレガーは調律の名のもと御許へ還ったことを、我、調律者リゼルがここに宣明する」

調律者……！？

こんな少女が、あの神の遣いと言われる伝説の調律者？

ならエリックは、調律されたって、エリックは要らない命ってこと？

私など気にも留めず、また何も説明もなく、少女は己を基軸に一回転し地面に杖で円を描く。乱れのない線が繋がり円を成し、その円から出てきた光が少女を包んだ。

逃げられる。

必死に少女へ駆け寄ろうとしても円より内側に入れない。そこにいるのに。手を伸ばせば届くはずなのに。

仇の少女を憎しみ……いや、怨念を籠めて睨み付ける。しかし少女は動じた風もなく無感動に見つめ返してきた。そこには、一欠片の後ろめたさも何もない。

「アンタがッ……よくもエリックを！ どうして……！？ どうして彼なのよ。アンタが死ねばいいんだ！！」

「……世界は調律の名のもとに調われる。だから世界に悲劇は満ち、そして抗する喜劇が生みだされる」

なぞかけのような言葉を最後に、少女は消えた。あとに残ったのは果てのない嘆きと、もう二度と私に笑いかけてくれない恋人だけだった。

……エリック。

小綺麗なタキシードと、爪にこびりついた絵の具。

せつかくおめかししたのに、と彼は自分の指を見て残念そうにしていた。私はそこが彼らしくて素敵だと、思った。どうしてあの時伝えなかったのだろう。

「エリック起きて。あのね、私、」

「……リリー」

「ね、エリック。私あなたに伝えたいことがあるの」

「リリーアーン、エリックは調律されたんだ。エリックは選ばれたんだよ、神に。これは喜ばしいことなんだ」

調律された者の魂は神の御元に呼ばれて、永久の樂園を約束される。調律によって世界を救った選ばれし者。喜ばしいこと。

それは誰だって知っていることだ。幼いころから子守唄のように聞き続けたのだから。

喜ばしい？ 世界のため？

私は思わず喉をひきつらせて笑った。

世界って、どの世界のこと？

こんな、彼のいない世界に一体何の価値があるの？ 救うだけの価値があるの？

答えは否だ。

調律者。あの女。……いつか必ず復讐してやる。

だから、ねえ、エリック。いつか絶対に仇は取るから。だから……
………今だけは、泣かせて。

空は相変わらず、清々しいほどよく晴れていた。

「あら、お帰りリゼルちゃん。またお仕事？」

「ただいまマリアさん。少し早いけど夕飯頼めますか」

「ええ、すぐ用意するから。一品おまけしてあげる」

「すみません」

「さて。食べる前にその浮かない気持ちをなんとかしちやいましょうね。せつかくのマリアさんお手製もそれじゃあ不味くなっちゃうわ」

「特に浮いている浮いていないとかないですよ」

「いいからいいから。まあ話して御覧なさい。私もリゼルちゃんのお話聞きたいし」

「……………たぶん新郎だった。花嫁姿の女に凄まじい形相で襲われた」

「あらまあ。ジルもたいがいだけど、リゼルちゃんもタイミング悪いわよねえ」

「そこで『何で彼なんだ』って言われました」

「あらあらそれは……………また、何とも陳腐で身勝手な台詞ねえ」

「全く」

「はい、おまちとおさま。まあそんな下らないことは忘れて、たくさん食べてゆつくり休みなさいな」

「ありがとうございます、いただきます」

<アーロ>

「寒い寒い死ぬ死ぬ」

今日は朝から変なお客さんが来た。

「うおお……本気で死ぬかと思った。つか俺がここで死ぬとうな
んだやっぱ種になんのか？ でもその前にリゼルに殺されそうな気
が」

「誰？ 何してるの？」

「おー少年！ 少年はこの家の子か？ 家に入れてくれねえかな。
温かい飲み物なんかあるとすげえ嬉しいぞ」

柵の向こうで震えていた白い塊はやっぱりお客さんだった。僕は
薪で塞がる両手の代わりに足で扉を開ける。

お客さんは文字通り転がり込んできて、ばたばたと駆けて暖炉に
へばりつく。あのままだと燃えちやいそうだけど。

しばらくすると全身にこびりついていた雪やら霜やらが溶けて、
お客さんの色が戻ってきた。お父さん以外に初めて見た大人の男の
人だった。レンガ色の髪の毛に茶色の瞳。肌も浅黒くて、お父さん
とは似ても似つかない。旅人さんなのかもしれない。

「お兄さんは、旅人さん？」

「んー、確かにあっちこっち行ってるけど……旅、じゃねえよなあ
コレ」

「ふうん？」

いまいちはつきりとした答えはもらえなかったけど、まあいいや。
僕の町は山奥にあるから外の人なんて滅多にこない。更に谷を越
えたところに僕の家はあって、僕は家族以外の人と会ったことがな
かった。初めてのお客さんは、まるで封のされたお菓子箱みたいに

わくわくさせてくれる。

「お兄さんは、何しに来たの？」

「調律しに」

今度はすぐにはつきりと答えてくれた。けれどさつきよりもよっぽど分らない。

「……………ピアノなら壊れてないよ？」

部屋の隅に置かれた黒光りを見る。お母さんが大好きだった、そしてよく弾いてくれてたピアノ。

お母さんが死んじゃってから誰も弾かなくなったけど、お父さんは手入れを欠かさないし、僕もこっそり遊んでいるからきれいな音が出るのは知ってる。

そう教えたのに、お兄さんはちよつと肩を揺らして笑った。何か面白いことでも言っただかな？

「ああ、あのピアノは大事にされてんな。でも……『コツチ』はひでえな」

よっこいしょ。掛け声とともに立ち上がったお兄さんは、コンコンと床を木の杖で叩いた。

そこで初めて僕はお兄さんが杖を持っていることに気付いた。杖の先は赤く暖炉を火を映す。真っ赤な石が埋まっていた。

「さて、仕事仕事。なあんで俺ばかりこんな過酷な労働環境なのかは置いといて」

ちようどその時、大きな扉が開いた。お父さんが起きてきたんだ。

「お父さん、おはようございます」

「アーロ、誰だそいつは」

「えっとね、旅人さんじゃないお客さんで、ピアノじゃないんだけど直しに来たの」

僕の答えじゃ満足できなかったのか、お父さんはますます目を細めてお兄さんを見る。お父さんがいつも、失敗した僕に向ける目とよく似ていた。ああ、怒られちゃう。習慣で目を瞑って歯を噛み締めた。

でもそんな僕に降りかかってきたのはお父さんのお仕置きじゃなくて、お兄さんの大きな手のひらだった。ゆっくり撫でられて、おそれるおそれる目を開けた。

「どうも、お邪魔してすいませんね。アントンⅡハータイネンさんで？」

「……………いかにも。私に何か用かね。あー、」

「ああすいません、まだ名乗ってませんでしたね。まあ名乗るほどじゃねえんですけどね？」

お兄さんはそこで一旦言葉を切ると、うつすらと笑った。おかしくてしょうがない、そんな風に見えた。

「俺は調律者^{バランサー}ジルベルトだ。アントンⅡハータイネン。調律の名のもとに貴様の命をもらいに来た」

お兄さんはジルベルトさんというらしい。ばかでのろまな僕にはそれしか分からなかったけど、お父さんは違ったみたいだ。顔を真っ青にして、慌てて今入ってきた扉の向こうに戻ろうとした。

「ははっ」

慌てるお父さんを眺めてお兄さんは笑っていた。僕のほうを見て滑稽だよな？ とお父さんを指差すけど、僕は「こっけい」の意味が分からなくて首を傾げた。

そうやってばかな僕をお父さんはいつも叱る。でもお兄さんは怒るところか優しく笑って、それでいい。と頭をくしゃくしゃに撫でてくれた。

もう片方の手はくるりと杖を回し、石のついた側が床をそつと叩く。

「アントンⅡハータイネン。全ての源、御許でその命を洗い流せ」

クオーン……

お腹の底が揺らされる音が響いた。その震えが収まらないうちに、お父さんが出ていった扉の向こうで階段から重くて大きい何かが落ちる音が聞こえた。

よくお父さんが僕を怒っているいろいろな投げたり壊したりする音よりも、もつとずつと怖い音に、薄く開く扉の向こうから目が離せない。そんな僕なんかお構い無し、とお兄さんは口笛でも吹きそんな様子でまた杖で床を鳴らす。つられて見上げると、なんとなく、杖の先の石が光っているように見えた。すぐに消えちゃったから気のせいかな。

「調律完了」

笑みを消して石を見つめるお兄さんは、さっきまでのお兄さんとは別人に見えた。

「アントン」ハータイネンは調律の名のもと御許に還ったことを、我、調律者ジルベルトがここに宣明する」

小さく呟いた声を最後に、家の中は静かになった。あんなに音を立てて二階に逃げていたはずのお父さんの音も聞こえない。外で吹雪く風が絶え間なく窓を揺らす音だけが聞こえる。

「……お父さん、呼んでくるよ」

どうしたらいいか分からなかったので、とりあえずお父さんと呼んでこようとした。お兄さんはお父さんに用があるみたいだし、何よりお客さんを放っておくのはよくないと思ったのだ。

「いや。お父さんと呼びに行く必要はねえよ」

「でもお兄さんはお父さんにご用があるんだよね？」

「仕事は終わりだ。俺はもう行かねえと……それに、少年も」

僕？

お兄さんは膝について目線を僕に合わせると、肩に手を置いた。

「少年、もうこの家にいても少年のお母さんもお父さんも帰ってこない。少年はここを出て外に行くんだ」

「でも僕は裏庭以外に外に出ちゃいけないんだよ。鍵だって」

そう、あの大きくて厚い扉は僕が通つちゃいけない扉なんだ。もし外に出たらまたお父さんにお仕置きされちゃう。

「鍵なんか、俺が開けてやるよ。そもそも少年はその気になれば鍵くらい開けられる」

でも、と僕は何とか説得しようとしたけど、お兄さんは振り向きもしないで外……裏庭ではなく、正面へと出る扉まで僕を引きずっていった。

そして杖で軽くノブを叩くと、やけに物騒な金属音をたててノブが壊れて外れてしまった。ギギイ……吹雪が扉のすき間から入り込んできて、少しずつそのすき間を広げていく。

「ほら、な」

得意気に笑ったお兄さんは吹雪く外に、躊躇いなく出ていった。

三步も歩けば、もう吹雪でお兄さんの輪郭しか見えない。

お兄さんが振り返る。

「少年。俺は調律者だから、少年に何もしてやれねえんだ」

吹雪の向こうからお兄さんが話しかける。その顔もやはり白く隠れてしまう。

「でも少年は自由だ。望めばどこにだって行けるし、何だってやる。何者にだってなれる」

カン、と風の音に紛れて杖が石畳を叩く音。白の景色に、ぼんやりと光が生まれお兄さんの影を包み込んでいった。

お別れなんだ。その事実がずっと僕の中に入ってくる。寂し

い。お父さんもお母さんも、もう誰もいないというお兄さんの言葉が蘇ってきて、その言葉が強く冷たく胸に刻まれる。

「お兄さん、また会える？」

「ああ。少年が全力で生きて生きて、そしたらいつか俺が調律しに来てやる。だからそれまで生き抜け」

じゃあな。軽く手を挙げたお兄さんに手を振り返そうとしたけど、その前にお兄さんは吹雪の向こうに溶けて消えちゃった。

僕は家の中を振り返って、また外を見て、もう一度家に身体を回転させる。静かな、寂しい家。お母さんがいなくなってから、本当はずっとずっと寂しかった。

「……………行ってきます」

小さく手を振って、外へ出る。もう振り返ることはしない。

身体に叩きつけられる吹雪が傷口に入り込んで、より一層寒さを伝えてくる。そのくせ昨日お父さんに殴られた頬は燃えるように熱く、熱いのか寒いのかよく分からなくなってきた。

もはや道の体を成していない雪の上を、ひたすら機械的に進んでいった。歩くこと。生き抜くこと。お兄さんの言葉だけを頭の中で繰り返し繰り返し唱えながら。

何度も諦めたくなつて、眠くなつて、視界が暗くなる度に小さな光が僕を導いてくれた。こっちだよ。そう言われているみたいで、その先には温かい何かが待っている気がして、感覚のない足に動くよう命じる。

けれど雪につまずいて転んじやったら、とうとうどんなに頑張っても起き上がれなくなつた。そうしている間にも雪はどんどん僕の上に積もって行って、何も考えられなくなる。

あの光はどこにあるだろう。最後に顔を前に向けると、揺れる光が見えた。それがさっきまでと違い、近づいてくる気がしたけど、それを確認する前に視界が真っ黒く塗りつぶされる。

ごめんなさいお兄さん。約束、守れなかった。

「おい！　こんなところに子どもが……坊主、しっかりしろ！」

ある北の町で遭難した子どもが一人発見された。身寄りはなく、町長が引き取った。

その子どもはよく学び、友に恵まれ、愛する人を見つけ、雪の中でも実る作物の種の開発に成功し名を上げた。初老に差し掛かる前に調律され亡くなったが、彼の表情に悔いはなかった。

幼少時の虐待の影響で障害を抱えながらも真つ直ぐに生き抜いた彼は、死してなお、その名を人々の心に残すことになる。

「うあー、やっと帰れた……」

「……………ジル？」

「マリアさん遅くにすいません。あ、夜食でもいいから何かねえ？」

「ええ、夕飯の残りを温めるから座ってて」

「ホント、助かります……………」

「それにしても遅かったわね、お仕事多かったの？」

「いんや、今回は一人だけ」

「……………ジルは、優しすぎるのよねえ」

「……まだ何も言っていないんですけど俺」

「ふふ、大体分かるわ。本当に調律者のあなたたちは皆、繊細よね」

「俺もんなキャラじゃねえけど、リゼルはどうかなあ」

「あら、あの子が一番繊細よ。ただ賢すぎるから誰からも、自分からも悟らせないだけ」

「へえ、さすが皆のお母様はよく見てらっしゃいますね」

「あなたたちみたいな大きい子を持った覚えはなくてよ？……はい」

「ううー、湯気が身に沁みるぜ。いただきまーす」

<イザヤ>

ソフィアにしましょう。

日に日に青白くなる顔に笑顔を浮かべて妻は言った。不健康なま
でに細くなった身体に、取り付けたように不釣り合いな大きなお腹
をさすって。ソフィア「グラツキー。あなたの名前よ、よろしくね？

妻アドリアナは昔から病弱な娘だった。私たち級友が遊びに行け
ば、いつもベッドの上で寂そうに微笑んでいた印象があった。

日を浴びないせいで白と言うより青白い肌。抱き締めれば折れて
しまいそうな身体。手は器用で、売り物レベルのキルトや編み物を
鼻歌混じりに作ってしまう。

私たちは滅多に学校に來れない彼女のもとへ、それこそ毎日のよ
うに見舞いと称して遊びに行った。

中でも私は熱心に通い詰めていた方だろう。級友からは通い妻と
からかわれ、彼女の家の者は使用人まで私の顔と名前を知っていた
くらいだ。

次第に私は一人で彼女のもとへ見舞うようになり、多くを語り、
心を通わせていった。

そのまま私たちは卒業し、それぞれの道を歩き始めた。しかし私
はこの町で仕事を見つけ、彼女のもとへ通い続けた。

二人は彼女の部屋から中庭、近所の公園、町の中央広場と世界を
広げていった。

一人前の仕事をさせられるようになった後、私は彼女にプロポー

ズした。今思えば恋人同然だったとは言え、付き合ってもいなかったのに飛び越えて結婚を申し出るなど恥ずかしくて堪らない。

それから四年。ようやく授かった我が子だが、妻の身体が妊娠に耐えられるかは難しかった。一時は堕ろすことも考えた。

しかし強い母の眼差しで彼女が産むのだと言い、今日その日を迎えた。

「ほら旦那さん！ 呆けてないで奥さんの手を握っておやりよ！ 名前を呼ぶんだ」

「あ、ああ……………」

予想通りの難産となった。母子共に危ぶまれたが、取り出された赤子は力強く泣き叫んでいる。

しかし妻は我が子を抱き締めることも、その顔を見ることも叶わなかった。

口元に耳を寄せれば辛うじて呼吸の音が聞こえる。しかし握り締めた手に手応えはなく、呼び掛けに目蓋を震わせることもない。

アドリアナ。アドリアナ。

あ、今動いたわ。ソフィーちゃんは元気ですねー。お父様似かしら？

ソフィアで決まりなのか？ 男の子だったらどうするんだ。

分かるわ。この子は、天使のように愛らしい女の子よ……

「はじめましてです」

無力に立ち竦む私に、やや舌足らずな挨拶が投げ掛けられた。

びつくりして振り向くと、いつの間に入ってきたのか小さい女の子が立っていた。身長を越える木の杖を抱える姿と、目の上で切り揃えられた黒髪がより少女を幼く見せる。

「そちらの女性はアドリアナ」グラツキーで合っているですか？」

「え……ああ。アドリアナ。私の妻だ」

「あ、よかったです。間に合って」ぱつと花が咲いたようにその子は笑う。その邪気のない笑顔に、状況も忘れて微笑ましい気分になった。その子の向こうでは産婆に抱かれた娘が、ソフィアがまだ泣いている。

「僕は調律者^{バランス}アランです。アドリアナ」グラツキー。調律の名のもとあなたに祝福を与えに来たです」

調律……調律者！？

緩んでいた心臓が縮む。

調律者と言えば死神よりも恐ろしい、死の使いだ。調律者は死を運ぶ。親戚筋にも調律されて齡二十で亡くなった人がいる。

まさか妻も、今ここで殺されてしまうのか？

「そんな、待ってくれ。妻は苦しんでやっと子どもを産んだんだ。

せめて一度抱くまでは」

「落ち着いてください。僕は彼女の命をもらいに来たわけではないです」

ゆつたりと調律者の少女は笑いかける。先程と違い、まさしく神の如く全てを包み込む笑みだった。

「彼女はまだ死ぬべきではない魂です。その輝きが弱まったので僕が遣わされたです」

若干危なげに杖を抱えて枕元にまで歩み寄った調律者は、妻の頭上に杖をかざした。小さな手にぐつと力がこめられる。

「アドリアナ！ グラツキー。魂に癒しを、あなたに祝福を」

杖の先端、正確にはそこに嵌め込まれた石が仄かに光を帯びる。そして滲み出るように溢れ始めた光の粒子が妻を包み込んだ。

非常識な光景だが、恐ろしくはなかった。ただひたすら安堵の心地が胸を占める。

「……………赤ちゃん」

光が消え、杖を腕に抱え直した調律者が譲るように下がる。

「ねえイザヤ、私の赤ちゃんは？」

「アドリアナ……！」

はしばみ色の瞳をはつきりとこちらに向け、妻が問う。すぐに産婆が娘を妻に渡した。真つ赤な娘は生命力の強さを示すように枕元でも泣き続ける。真横にはそれを見つめ、愛しげに目を細める妻の笑顔。

ああ、神よ……

心の中で十字を切り、そこではたと調律者の存在を思い出す。振り返れば調律者と目があつた。こんな小さい子が、しかし奇跡をもたらしたのだ。疑いようがなく、神の御使いたる調律者。

「調律者、感謝します。妻を助けていただき、何とお礼を申し上げたら……」

「いいえ」

返ってきたのは、それまでの調律者の印象を一新する冷え冷えとした否定だった。

見ればその顔には何の感情も乗せられておらず、切り揃えられた黒髪の下で蒼の双眸がまばたきをする。

「いいえ、お礼を言うことではないです。それに……僕にはもう一つお仕事が残ってるです」

両手で杖を掲げ、調律者は二回、杖を叩き鳴らす。水面の波紋が引いていくように部屋の空気が変わっていくのを肌で感じた。

「ソフィア、グラツキー。調律の名のもとにあなたの命をもらいに来たです」

水の中に、そっと、石を投げ入れるように。

クォーレン……

杖の先端が床に触れるとそこを基点に不可視の波が広がる。それが部屋の隅まで、角に置かれたベッドの上の二人にまで届く。

「……………ソフィア？」

まず異変に首を傾げたのは妻だった。小さな身体をめいいっぱい使って泣き叫んでいた娘が、ピタリと泣くのをやめてしまったのだ。「ソフィア、どうしたの。ソフィア、ソフィーちゃん？」

次第に焦燥を滲ませて娘の名前を呼ぶ妻の声に、私はようやく二人に駆け寄ることを思い出す。

「あなた、ソフィアが……………」

眉を寄せて見上げる妻の顔色は、せつかく戻った朱が引き蒼白になっていた。その横では、ぐったりと四肢を投げ出す娘。

……………「冗談だろう？」

「調律完了」

「ソフィア、ソフィア、ソフィア」

「ソフィア・グラツキーは調律の名のもとに御元へ還ったことを、我、調律者アランがここに宣明する」

それしか知らないようにひたすら娘に呼び掛ける妻の声と、滑らかに口上述べる幼い声が混じりあつて頭蓋を揺さぶる。吐き気がする。

「何を、した」

同じように杖を両手で持ち床を二回叩いた調律者の視線は杖の先端、光る石に注がれていた。

妻を助けた時と違い、その光は外から中へと取り込まれていくように消えていく。それからようやく、調律者はあどけない瞳をこちらに向けた。

「ソフィア・グラツキーもまた調律対象でした。アドリアナ・グラツキーとは逆ですが」

「……………何故だ」

唸るように絞り出した自分の声が感情の引き金となる。

「何故、妻の目の前で殺した！ 妻の命は助けたくせに、どうしてこんな無力な赤子を殺せる！」

「殺してではなく調律です。常世の海に沈むことなく、種となってソフィア・グラツキーは御許に還れるです。それに、一度抱くまでは、と仰っていましたよね？」

それは……確かに言ったかもしれない。しかし、それは言葉の綾とでも言えいいのか、本当に一度抱けばいいと思っていたわけがないだろうに。

そんな当たり前のことも分からないのだろうか。

「一度抱いたら満足ですよねはい死んでください、か？」

はっ、と嘲笑を含めた呼気が洩れる。踏みしめるようにゆっくりと三步も歩けば、壁際に佇む調律者を追い詰める。

調律者は何かを考えるように首を傾げ、口を開こうとした。その

無邪気で愛らしい仕草は、しかしこの上なく無神経なものとして神経を逆撫でする。

拳を握り締め、腕を振り上げる。女子どもだからとか、手加減とか、考える余裕はなかった。

「い……………」

「だ、旦那さんちよつと」

視線を逸らさず大人しく殴られた調律者は、さすがに顔をしかめた。それに慌てたのは産婆だ。もう一度と掲げた腕を取られる。

怒りを隠さずに調律者を睨み付けた。俯き、さらりと黒髪が覆うその表情は分らない。

「ふざけるな。何が調律だ、この人殺しが」

「………… 僕のお仕事はこれでおしまいです。失礼しましたです」

「二度と来るな！」

近くの花瓶を投げつける。しかし調律者は消えたあとで、無惨に砕けた花瓶と中の花が床に散った。

………… あれから、妻は心を病んでしまった。子ども用の御包みや産着を山のように編んでは、元通りになった腹を擦りソフィア、と呼び掛ける。

「ソフィア、今日はいいい天気よ。空が青くて気持ちいいわ。早くあなたにも見せてあげたい」

妻が私を見ることはもう二度とない。同じく、私が生涯で調律者に出会ったのも、あれが最初で最後だった。

「ただいま帰りましたです」

「お帰りなさいアランちゃ………… って、どうしたの顔真っ赤よ!？」

「何でもないです。あ、今日の飯は何ですか？」

「……ジルご所望のビーフシチューよ。はい、これで冷やしてなさい」

「う、冷たいです」

「当たり前です。もう、どうしてアランちゃんはいつも怪我して帰ってくるのよ。あなたたちはそういうのを回避できる術があるのでしょう？」

「この痛みは命の重み。背負うべき重みを避けることなんてできないです」

「相変わらずかてえなあアラン」

「あらジル、おはようかしら」

「……ジル、まさか一日中寝てたですか」

「悪いが、自主休暇だよ」

「ジルベルトが一番仕事の進み遅いってリゼル言ってたです」

「……あ、マリアさん俺もメシ」

「はいはい」

「マリアさん、こんなやつ甘やかす必要ないですよ」

「まあまあ。ほら、餌付けって大事よ?」

「え……………俺、餌付けされてんの?」

「それは置いといて、さっきの話だけどね」

「さっき?」

「ジルには関係ないです」

「アランちゃんの言い分も分かるわ。でもこう毎回だとねえ…………」

「命は大切なものです。真摯に向かい合わなくては」

「うん、だからね…………アランちゃん自身のことも、大切にしておいて」

「……………善処するです」

「つか俺は腹が減りました」

「あら、そうね。他の子はまだ帰ってきてないけれど、三人で先に食べちゃいましょうか」

「よっしゃあ、いただきますーす」

「いただきますです」

< サクラ >

それはおそらく、私が人生で見た中で最も美しく悲しい命のカたちだった。

「サクラ様おはようございます！」

「サクラ様、今日の禱儀もお疲れ様でした」

「あー、サクラさまだ」

「サクラ様、息子の熱が朝方下がりました。ありがとうございます！」

朝の禱儀を終えて習慣となっている散歩に村へ出れば、至るところから声を掛けられる。どの村人も生き生きとした表情で、顰が望めなくとも満たされた生活を送っていることが知れる。

……いや。彼らの心が清いから、あのように笑えるのだ。

私が住む村は貧しい。険しい山に囲まれてなかなか外との貿易が望めないのに、平らな土地が少ない村では畑もろくに耕せない。

そんなただでさえギリギリの生活は、献上やら供物やらと称して社が行う強奪によって、ますます苦しく彼らを追い詰める。

それでも彼らは私を慕い、こうして名を呼んでくれる。病に苦しむ者を助ければ涙ながらに頭を下げられる。その病の原因は飢餓や栄養失調によるものだというのに。

私はこの村出身ではない。ここよりもずっと東にある小さな島で私は生まれた。

そして私は、特別な力を持っていた。夢見で先の災害を見通し、霊視を行い、僅かだが自らの生命力を他者に分け与えることもすれ

ば、乾季には雨を乞う。

パランサー

神の御使いである調律者とは違う、けれど同じような奇跡の力。人々はそれを歓迎し、私もまた、力を持つ者として在る意味を考えそのように振る舞った。

やがて、この地方に龍穴……大地の力が地上に流れ出る場所……があると言われ、私は白装束の人間たちによつてこの村に連れてこられた。あの不気味な白装束の人間が、祈祷を通じて神と交信するとか囁く社の者たちであつたことはそのあと知つた。

別れ際の母は満面の笑みに、無理矢理ひねり出した涙を浮かべて手を振っていた。その後ろに褒美ものを山と積んで。

この村は確かに住み良い。大地の力をいつでも感じとれ、それに満たされ、私の力も苦勞なく発揮される。必要以上の献上物や豪華な食事を与えられる私には外の貧困など関係なかった。

朝の禱儀と、毎食行われる祈り。毎日のように村や山を越えたところから届く捧げ物。感謝や敬意の混じる人々の視線に賛辞の声。そして、それらを余すことなく受け微笑む自分。

……もう、何年こうして生きているのだろう。

気を抜くと、ふとわき上がってくる小さな問いかけ。

これまでの時を思い、これからも続くであろう時を思う。そうすると鉛のように身体が重くなり、正体の分からない何かに深く絶望した。

私は神に選ばれたのだろうか？

社の人間は私を巫女と呼ぶ。巫女は神子に通じ、神の愛娘としての証がこの力なのだと教えられた。

もし真偽を私に問う者がいれば、私は否と答えるだろう。

神は私を、この世界を愛してはいない。そもそも愛する対象にす

らなっていないに違いない。

それに気付いた時、私は調律者と呼ばれる存在に興味を持った。確かに存在する、神の手足。この世界に在りながら世界から逸脱した者たち。

彼らは何を思い、何を知るのか。あるいは人形のようにただ力を振るうだけの駒なのか。

会いたいな。

何の気なしに呟いた願いは、しかし叶えられることになる。

「サクラ」ミナズキはお前？」

社の奥で精神統一をしていた時、それは現れた。

振り返ると同じ年くらいの少女がいた。身の丈もある木の杖を持ち、翡翠を埋め込んだような瞳はまるくて愛らしい。高い位置でまとめてある亜麻色の髪が風に揺れる。若草の衣服は村人の着るそれと大差なく、纏う雰囲気さえ無視すれば村娘が迷い込んだのかと思っただけかもしれない。

笑えば間違いなく十七、八の少女だと思えるだろうに、その容貌は間違いなく愛らしい少女のものだろうに、冷めきつた表情は何もかもを拒絶する。人間としての温かさすらないのではないかと思ってしまう。

私は氷の仮面を被る少女に微笑んでみせた。

「聞くまでもないでしょう？ 調律者どの」

「……私たちが分かるのか」
表情は变えず、ただその声に幾ばくかの驚きを混ぜて少女は答える。

伝説に出てくる調律者は皆それこそ死神だったり天使だったりと

人外に描かれているから、一目で分かる人間は少ないのだろう。私も正直、ここまで普通の少女だとは思わなかった。

「ええ、まあ。あなたたちとは違うけど一応、力ある者だもの」それを聞いた少女は目を細めて私を見つめる。その意味を私は読み取れなかった。

「ならば話は早い。私は調律者リゼル。サクラミナズキ、調律の名のもと……」

「私は、調律を、拒絶します」

私の力の一つに言霊がある。通用したのか分からないが、少女が杖を掲げて床に落とそうとする動きを止める。私に注がれる眼差しは相変わらず冷えきっていて、彼女の感情を上手く隠していた。

「私は」

立ち上がり、少女と正対する。

「私は、力ある者として正しく生きてきたつもりです。けれど……もう、疲れてしまった」

そう、私は全てに疲れていた。向けられる笑顔、感謝の言葉、無言の期待、積まれる捧げ物、力足りずに亡くなってしまう者たち。自分が特別な力を持って生まれた意味を考えたこともあった。けれどおそらくそこには何の意味もないのだろう。そうでなければ、これほどまでに理不尽な生と死が蔓延するわけがない。

人は、あんなにも懸命に生きているのに、神さまにはどうでもいいことなのだ。

悟ったときから心に澱のように溜まる絶望や諦念は、確実に私を蝕んでいった。

「この世界は愛しいけど、ここで生きていくのは辛すぎる。私は終わりたい……還って、いつかまたここに帰ってくるなんてもう耐え

られない」

輪廻転生は否定派もいるが、私は真実だと思っている。数人だが見掛けたのだ。以前にも触れた魂と同じ力タチを持つ、全く異なる人を。ただ魂そのものが以前の何を一つ記憶していなくて、色も違ったから気付きにくかった。

そこまで気付いて、ようやく理解した。御許に還って俗世の穢れを払い楽園に……というのは、生前の全てをリセットされて新たな人間となって再び現世に生まれてくることなのだ。

魂の再利用。

それこそ調律の正体だ。

ぞっとした。恐ろしくなった。それは命を物のように扱われることにではなく、私もいずれ調律され、けれどそれが終わりではないことに、だ。

どうすればそれから逃れられるのか分からない。ただ調律されるくらいなら自分で舌を嚙んで死のうと決意した。自害は最大の罪とされているので、そうすれば御許にはいけないだろうと思ったのだ。楽園などいらぬ。望むのは終わりそのもの。

「死ぬのは構いません。でも調律されるならば私は自ら死を選びましょう……神さまの気まぐれに付き合わされるのは、今生きている間だけで十分」

少女は何も言わない。視線も逸らさないし身動き一つない。氷の面も凍ったままだ。まさか、調律者は神の意思に従って動いただけの人形なのだろうか。そう思うと少女の端麗な美しさも納得できる。しかしここで尻込みして退くわけにもいかない。調律者の力と私の力にどれほど隔たりがあるのか知らないが、黙って調律されてやることだけは絶対にしない。

「別に問題ないでしょう、世界に在る命の量とやらさえ保てるなら。

どうせ人間のことなんて、調律者であるあなたにとってはどうでもいいことなのでしょうから」

「……どうでもいい、こと」

「おや、と私は首を傾げた。なるべく毅然と対峙しようと構えたのだが、どうも返ってきた反応は予想と違う。真っ直ぐに向けられていた翡翠が伏せられ、なんとなく、少女の纏う雰囲気が変わったように思った。だけど何が？ 一体何が彼女に影響を与えたのだろう。もう少し慎重に、気を探りながら、私は言葉を紡いでいくことにした。もしかしたら。」

「たとえ調律が世界を維持するために必要だとしても、だからって悲しくないわけではないでしょう。それでもあなたたちは調律する神さまがそう望んでいるからという理由だけで他の全てを、私たちの思いを踏み荒らす。調律者であるあなたには私たち人間の機微なんてわからない」

「違う！」

突然すぎて心臓が止まるかと思った。カン、という可愛らしいものではない激しい音で杖が床を鳴らした。

少女は本当にわずかだが目を細め、違うと繰り返した。それは私に対してというより、彼女自身に対して言っているように思えた。

「誰も、好きで調律者なんかに」

「……何が違うのか知りませんが、それなら私を調律しないで死なせてくれるのですか？」

少女の瞳が、そして氷壁に覆われていた魂が揺らぐのを見て私は言葉を重ねた。一つ一つの音に意思を、言霊をこめて魂そのものに語りかける。

この時にはもう確信していた。調律者と呼ばれる彼女らも私たちと同じただの人間だと。

「……………調律は、絶対である」

あと一押しと思っていた私は、絞り出される声に息を呑んだ。違う。その強すぎる意思が練りこまれた声もはつとさせられるものではあったが、それ以上に直立不動の姿勢で立つ少女の後ろに幻影が見えたのだ。無意識のうちに霊視の力を使っていたらしい。彼女の魂を覆い隠していた氷が薄くなっていく。その力タチがはつきりと見えてくる。

「神の意思は関係ない。私が調律者である限り、私は調律し続ける。全ての命に平等に。お前たちの感情も事情も私の知るところではない」

声は平坦なままだが、それは慟哭のように私には聞こえた。少女が杖で床を二回叩く。すると杖を中心に波のように大きな力が部屋に広がっていった。この空間は私の力が統べていたというのに、抵抗らしいこともできないまま上書きされていく。

このままでは調律されてしまう。けれど突破口はあった。少女の魂はもう丸裸も同然で、干渉できるだろうから。

それでも私はもう何も出来なかった。抗おうとする気持ちが湧きあがらない。だって、あんな。

あんな痛々しそうな姿を見て、どうしてこれ以上彼女を傷つけられるというのだ。

全ての氷が取り払われた少女の魂はぼろぼろだった。その中で拭うこともせず涙を流し続ける少女がいた。翡翠には様々な感情が詰め込まれていて、震える唇は何かを伝えようとして、それでも何も言えなくて、ただひたすら人々の憎悪や悲哀を受け止めるしか術を知らない無力な少女が。

「サクラ＝ミナズキ」

はつと焦点を現実に戻す。肉眼で見える少女は出会ったときと何も変わらない氷の眼差しで私を見つめ返す。

杖の、おそらく真正銘の翡翠が埋め込まれた先端が床に触れる。先ほどの比ではない、何もかもを飲み込むような荒波を思わせる力が広がり、私に向かってくる。止められない。

「調律の名のもとに、お前の命をもらう」

クオーーン……

意識もあいまいになり黒く塗りつぶされた世界で、魂を震わす音が辺りに満ちる。けれど私にはそれが少女の嘆きに聞こえた。

それ以上のことは、私には何も分からなかった。確かに積み上げてきた『水無月桜』のカタチが失われていく中、私はしょうじょが、もうきずつかないようにとねが

……。
……。

「私は絶対に謝らない、後悔しない、躊躇わない。あなたの命を奪うことに対して弁明しない」

「ただいま帰りました」

「お帰りリゼルちゃん。今日はねー」

「ごめんマリアさん、今日は食事いい」

「あら……………そう、分かったわ。じゃあ一応取り分けておくから夜食にでも明日でも、好きなときに温めて食べてね」

「ありがとうございます、おやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい。……………ジル」

「いやいやマリアさんそんな目で見られても」

「あなた伊達でも年上じゃない。こう、フォローとか」

「伊達って」

「私じゃあなたたちを励ますこともできないもの」

「え、いや、俺らマリアさんにけっこう助けられていますよ」

「でも今みたいな時無力だね。話を聞くこともできなくて」

「うーん……………リゼルはもともと交流する性格じゃねえし、俺もあんま話聞いたことは」

「もー」

「それに傷つくのも悲しむのも、そうなりやすいから調律者には選ばれたんだ。悲劇は神サマのお気に入りさ。イチイチ気にかけてちゃマリアさんの『命の量』も減っちゃいますよ」

「構わないわ。私のことなんて」

「それは困る。もしマリアさんを調律しなきゃならなくなったら、例えばリゼルならもう立ち直れない」

「あら、それはちょっと嬉しいかも。ジルは？」

「もちろん、俺も」

「ふふ、よろしい……そうね。私は何もできないけど、シフォンケーキを焼くくらいなら」

「おおー！ ぜひオレンジピール入りで！」

「ジルの好みは聞いてないわ。あなたはさつさと夕食食べてちょうだい、片付かないわ」

「うん俺さマリアさんは俺にもっと優しくしてもいいと思う」

<オレリア>

わたくしは美しい。誰よりも。かの天使ティランも嫉妬する美しさだと称えたのは、いったいどの男だったか……

「オレリア、君の美しさには劣るがこれが僕の気持ちだ」

年にわずかししか咲かないという薔薇を花束にして贈ってきた男もいた。

「オレリア、君のために特別に作らせたよ」

王族ですら滅多に手に入れないハルプス産真珠のネックレスを贈ってきた男もいた。

「オレリア」

「オレリア」

「オレリア」

灯火に群がる虫のように男たちはわたくしを求めた。わたくしは中流貴族、それも落ち目の家の次女であつたがそれを嘲笑うのは女たちだけだった。彼女たちは可哀想なことに醜いから、そんなふうにして自分たちを慰めているのだ。

男たちは皆わたくしの虜になる。そしてその中でも財力政治力がありわたくしに劣らない外観を持つ男だけが、わたくしの周りにいることを許されるのだ。ああ、ただ、一人だけ例外がいるが……

「オレリアさん、貴女はまた本をこんなふうに扱って」

ページを開いたまま裏返しにして机に置いた本をほつそりした手が持ち上げる。そのまま断りなく本棚に戻した青年が眉をひそめてわたくしを見た。睨んだ、ではなく見た。相変わらずの根性無しである。

昼過ぎの柔らかな風に誘われ、居間のソファで微睡んでいたわたくしは重たい目蓋を持ち上げて見返してやった。この悩ましい視線一つのために男たちは金と愛の言葉を積み上げているのに、この男ときたら。

「そんな不機嫌そうにしてもだめですよ。さあ、旦那さまが呼びです。まったく淑女がこんなところで昼寝など……」

「ここはわたくしの家よ。何処で何をしようがわたくしの自由ですわ」

「何を子供みたいな屁理屈を」

少し唇を尖らせても呆れた態度しか返ってこない。本当、つまらない男。

「ねえ寒いわ」

「こんなところで何も羽織らず寝ているからですよ」

素っ気なく言いながらあらかじめ持つてあつたストールを肩にかけてくる。半端に甘いのだ、この書生は。だからいつまでも書生止まりなのだ。

この世話係のような青年は数年前に兄が拾ってきた。以来この家に住み込みで働いている。そして気づいたら書生という肩書を持っていた。どういうわけか父も兄も青年を気に入ったらしく、ゆくゆくは兄の秘書に就かせるつもりだと聞いた。母も息子のように甲斐甲斐しく世話を焼いている。神経質そうで薄っぺらな顔の、こんな男の何がいいのか。

「シューバル、お父さまは何のご用ですって？」

「オレリアさん、僕はスバルです、昂」

「シューバル」

「昂」

だからそう呼んでいるではないか。何が違うというのか。

「……シエンバル」

「……嫌がらせですか」

「失礼ですわよ」

発音一つでここまで言うほうが嫌がらせだろう。話が進まない。

「それで、お父さまは何て？」

「ダーグ卿からの花見の招待だと思いますよ。そろそろそんな時期でしょう」

「ああ、そうね」

姉の嫁ぎ先の従兄、という近いのか遠いのか分からないダーグ卿は毎年春先に大きな花見会を開く。何年か前からわたくしは毎年招待されていた。他に招かれるのは一定以上の地位を持つ未婚の男女が多く、その意図は明らかで、まあ、わたくしはどちらかと言うと男性招待客を釣る餌なわけだ。疑似餌。生き餌でもよいけれど。

予想通り今年も花見会に招かれたわけで、耳の早い男たちが早速エスコート役を名乗り上げた。わたくしはその中から以前真珠のネックレスを贈ってきた資産家の男を選び、花見用のドレスを新調したいと言った。相手は笑顔で了承し有名なデザイナーを呼んだ。やはり男はこのようではなくては。

そうして迎えた花見当日。最高級のドレスと男、二つを携えてわたくしは馬車に乗り花見に向かっていた。今では蒸気自動車が普及しつつあり、馬車は貴族が特別な時に利用するものとされている。一昔前はむしろ自動車を保有していることがステータスだったというから、時代の流れは面白い。

そんなことをつらつらと考えながら一生懸命話しかけてくる男の言葉を耳に入れていた。そんな時、わたくしの人生を滅茶苦茶にするあの忌まわしい出来事が起こったのだ。

馬のいななきと外の従者の怒声が聞こえた。そして暴力的な音とともに襲ってきた衝撃。

何をと思う間もなかった。馬車は傾き、激しくドアに叩きつけられたわたくしの身体はそのまま外に放り出されてしまった。地面に着地した時にはもう意識はなかったと思う。記憶にない。意識が明瞭に戻るまでで覚えているのは、ひどい吐き気と暗闇の中響く声。それから、柔らかく灯る赤銅の光

ああ、オレリア、なんてことだ。

そんな、『これ』がオレリアなのか……？

せつかく祝福を受けても、これでは……

光が消えた。代わりに何だろう、声が聞こえる。そうして意識を浮上させたわたくしを待っていたのはおぞましい現実だった。

最初に飛び込んできたのは真っ白い天井。病院だ、わたくし事故に遭ったんだと分かった。痛みは感じなかったが、経験したこともない気持ち悪さに頭を抱えなくなった。無意識に手を頭へと伸ばしたところで、首から上だけやけに大げさに包帯やら何かごつごつしたものに覆われていることに気付いた。それからこちらを見る、家族や医者視線も。

……………何。

彼らの視線には目覚めたわたくしに対する好意的な感情などひとつかけらも含まれていなかった。被害妄想でなければ穢らわしいモノでも見るような。

「オレリアさん、ご自分が誰か分かりますか」

医者が事務的に近寄り声をかけてくる。その視線は本来注がれるべきわたくしの顔ではなく手の書類に向けられていた。

「オレリアーベルリオーズ」

「貴女は事故に遭ってここに運ばれてきました。覚えていますか」

「えっと、馬車に乗っていて……」

「気分は」

「とても気持ち悪いわ。吐き気は、少し残っていますけどさっきよりは楽になりました」

なんとなく医者の態度に反感を抱く。医者であるからというより、そもそも男からこんなぞんざいに接されたことがない。この医者だけではない。その後ろに控えている家族の様子も変だ。わたくしを溺愛している父ですら少しも嬉しそうではなかった。

一通り確認を終えた医者はさっさと出て行ってしまった。残されたわたくしたちの間に沈黙が落ちる。わたくしはまだ頭が混乱していて、事故の前後もよく思い出せなかったし周囲の態度も態度だったから何も言えなかった。兄は「仕事を放り出したままだから」と出ていき、父も本当にゴミでも見るように一瞥しただけで帰ってしまった。母だけは痛ましそうな顔をしてわたくしを眺めていたが、しばらく入院することになった旨を告げると父の後を追った。

何がどうなったのか、まったく分からないままわたくしは置き去りにされてしまった。

しかし翌朝の朝食時に理由が分かった。朝食の世話をする看護師に、その前に顔を洗いたいと言った。昨夜は気持ち悪さに思い浮かびもしなかったが身を清めていない。髪も触っただけでもかなりバサバサしていて耐えられなかった。

するとはつとした看護師は、少し迷う素振りを見せてからわたくしにポケットに入れてあった手鏡を見せてくれた。首が動かないわたくしはそのまま鏡の中に映っているであろう美しい顔を見た、つもりだった。

爛れたような傷に覆われた頬。奇妙な形の鼻。腫れて潰れた
みたいな左目。目元から口元にかけてざっくりと走る大きな切り傷。

化け物じみた何かが、わたくしを見返していた。

「……………だ、れ」

これは誰……………いいえ。これは、何？

「あなたは馬車の外に投げ出された後、馬車の後輪に踏まれたので
すよ。本当は生きているのが奇跡なくらいの大怪我でした。私たち
も諦めかけていたのですが、その、御使いが」

「は？」

話を聞くに、運び込まれたわたくしは本当に手の施しようが
ないほどだったらしい。そして生死の境を彷徨うわたくしを前に、
神の御使いたる調律者の青年が現れてわたくしに祝福を授けたのだ
と云う。

信じられないが、今わたくしが生きていることを考えると真実な
のだろう。馬車に撥ねられて生きていられるとは思えない。

「それで、その御使いは今どこに？」

「ええっと、分かりません。その後すぐに消えてしまって」

「そう……………いいわ、もう出ていってちょうだい」

「え、でもまだお食事が」

「いいから出て行けと言っているのよ！」

わたくしの剣幕に怯えてか逃げるように出ていった。いや、違う
か。この醜くおぞましい顔に恐れたのだろう。

絶望が胸に巣食う。家族の反応にもようやく合点がいった。どう
して、こんな。

事故と聞いてわたくしのもとには次々に見舞客が訪れた。けれどもわたくしの変わり果てた顔を見るとすぐに帰って行った。二度目の見舞をする者はいない。家族も、最低限の生活用品を使用人に届けさせただけで一度も来なかった。誰もがわたくしの美貌が失われたことを嘆いた。一週間もすると、もう誰も来なくなつた。見舞の品すら届かない。わたくしもこの顔を見せたくなくなつた。

そして退院日にわたくしを迎えに来たのはあの書生だつた。彼とは事故以降会っていなかったが、少し痩せたようだ。普段も細くて白いくせに一層元気を失くした風だつた。が、わたくしを見ると笑つた。そう、笑つたのだ。わたくしの顔を見て。

「ああよかった！ 本当にご無事だつたのですね。旦那さまたちは何も話してくださらず、見舞に行ける身でもなかったのです」

よかった？ よかつたですって？ 今、この男はよかったと言つたのか。皆嘆いてくれたのに、そんなことを言つて喜んだのはこの男だけだ。何て人だろう、ここまでわたくしを嫌っていたのか。

わたくしは頼んでおいた大きなつばのついた帽子をかぶり、書生と顔を合わせず、声に応じることもなく病院を出て待っていた車に乗り込んだ。家に着いて自室に入るまで顔をあげなかった。幸いなことに書生以外はわたくしを避けてあいさつすらしなかったので、わたくしもそのまま通り過ぎることができた。

それからの日々も、病室にいたところと何も変わらない。訪れる者はなく、使用人もなるべくこちらを見ないようにして黙々と世話をする。山のように積まれる贈り物も絶えた。時折書生だけが気分転換と称して茶菓子を差し入れたり、外に連れ出そうとしたりして鬱陶しかったが。

そんな死人のような毎日を送っているわたくしのもとに、『彼は来た。』

「よう、オレリア＝ベルリオース。気分はどうだ？」

ぼんやりと自室から外を眺めていたら、いつ入ってきたのか赤銅の髪を持つ青年が声をかけてきた。手に持つ大きな杖が不格好だったが、かなり整った顔立ちをしている。

「どなたかしら」

今のわたくしを見て気分を訊ねるなどいい神経をしている。聞かなくても分かるだろうと言外に伝えると赤銅の青年は薄く笑った。

「俺は調律者ジルベルトだ。あの日お前に祝福を与えたのは俺だよ」「どうして！」

調律者と聞いて思わず叫んでいた。心の中で燻っていたモノが瞬く間に再熱し内側を燃やしていく。

「どうして、どうしてわたくしを殺してくれなかったの！　こんな顔になって……わたくしは死にたかったのに！」

本当、どうして放っておいてくれなかったのだ。美しくないわたくしになど用はない。醜くなってまで生きたくなどなかった。

そんなわたくしを見て、青年はあっさり言った。

「んじゃあ綺麗な顔だったら生きたいのか？」

「え？」

「元のお前の顔に戻ったら嬉しいのかって聞いてんだ」

「それは、もちろん」

青年の飄々とした態度に怒りの矛先を見失う。青年はそのまま、軽い口調でじゃあ治すかあと言うと杖を一振りした。その先端から溢れた、青年の髪と同じ色の光がわたくしの顔を包み込む。

そしていまいち事態が把握できていないわたくしなどお構いなしに、青年はわたくしの顔を見て頷くと「じゃあなー」とにこやかに消えた。文字通りその場から消えたのだ。

青年が去った部屋で一人ぼうつとしていたが、青年の言動を反芻し、まさかと祈る気持ちでわたくしは引き出しにしまってある手鏡

を取り出す。化粧台についた大きな鏡は、とつくに割っていた。
恐る恐る鏡を覗く。

「……………治っている」

そこにいたのは見慣れた、かつての美しいわたくしだった。傷跡も、曲がつてしまった鼻も元通りでそこに事故の面影はない。

こみ上げてくる感情を抑えきれなくて、わたくしは部屋を飛び出し居間に向かった。ちょうど夕餉時だ。はしたないと分かっているも走る足を止めることはできなかった。

「お父さま、お母さま！」

「オレリア!?」

「まあ、あなた顔が！」

誰もがわたくしの元通りの美貌を見て驚いた。けれど上がる声はどれも喜びに満ちたものだった。事情も聞かずに皆わたくしを受け入れてくれた。

わたくしの顔が元通りになったことはすぐに広まった。そして再び贈り物と男たちに囲まれる生活が戻ってきた。誰もがわたくしに跪き、わたくしの美しさを称える。そう、これよ。これこそが在るべきカタチ、わたくしの幸せ。

けれどそんな満たされた心地は長く続かなかった。以前よりも頻繁にお茶会などに招待されるようになったわたくしはその日も外に出かけていた。野外パーティーだったのだが少し風が強く、風に飛ばされてきた葉が一瞬、頬を掠めた。

その瞬間背中を走った恐怖は言葉にして表現できない。

忘れていた。外はわたくしの美貌を脅かす可能性に溢れているのだ。またあんな醜い顔になったら？ そんなことは考えたくもなか

った。

すぐさまわたくしは家に帰り、自室に引きこもった。だめだ、部屋にある化粧道具や装飾品も肌を傷つけるかもしれない。全て捨てさせた。窓から差し込む光も気になった。最近の研究で肌によくない何かが光には含まれていると判明したのではなかったか？ カーテン……いいえ、足りない。外から窓を突き破って何かが投げ込まれるかもしれない。急いで窓を木張りにして塞がせた。そして顔は仮面で隠し、自分以外の人間を部屋から追い出した。

周りには何もなくて、静かで真つ暗な空間だけがわたくしを取り囲む。そこでようやく安心できた。ああ完璧、これで大丈夫。わたくしは、ずっと綺麗でいられるわ

「ただいまー……って、何やってんの二人とも」

「あ、ジル！　ねえ見て見てリゼルちゃん可愛いでしょ？」

「あ？　……ああ、リゼル髪型変えたのか」

「マリアさんが勝手にやっただけ。こんな面倒なこと私はしない」

「だってリゼルちゃん、こんないい素材なのに化粧もしないし飾りの一つもつけないし、髪だっていつも一つ縛りで勿体ないじゃない」

「素材って」

「ほら、ジル！」

「はい？」

「はい、じゃなくて何か言うことないの？」

「え？ あー……うん、似合っている。可愛いよ」

「心がこもってないわ」

「いやあ男にそういうの求められても。つかやっぱり女って、そういう着飾るの好きなんだな。綺麗でなくても幸せになる道はたくさんあるのにさ」

「あら、当り前じゃない。女の子は出来るだけ綺麗になりたいものよ。特に好きな人の前では」

「いや私は別に」

「あ、リゼルがお洒落してるです！」

「アランちゃんもいらっしやいな、髪飾りつけてあげる」

「えへ、こういうの初めてです」

「おー！ アランその髪飾り似合ってんじゃねえか」

「そうですか？ ジルありがとうございます」

「……………リゼルちゃんには薄い反応でアランちゃんにはこの絶賛ぶり」

「マリアさん、世の中には『そういう』趣味の男も少なからずいますよ」

「いや、俺はただアランが可愛いと思ったから褒めたんだけど」

「……………変態」

「変態だわねえ」

「変態です」

「え、いや、ちょ、誤解………待ってマリアさんそれ俺の夕食ですよ
ね何で片づけてんですか本当誤解だから他意はねえですから！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014ba/>

箱庭の遊戯

2012年1月14日19時54分発行